



教職大学院

Newsletter

No. 155

福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科 since2008.4 2022.02.19(公開版)

今年度（2021年）4月、福井大学では学部、教職大学院、附属学園「3組織を横糸として3組織を通貫する業務内容や構成員のアイデンティティのあり方に縦糸を通す」（松木健一 ニュースレター147号 巻頭言）ことを任務とした「総合教職開発本部」が設置された。本号では総合教職開発本部を構成する部門会議の中から国際教職開発部門会議（以下、国際教職開発部門と記す）について紹介する。

アジア・アフリカ・中東・日本を結ぶ

教師の専門職学習コミュニティネットワークの構築

福井大学総合教職開発本部 国際教職開発部門
高阪 将人

「なぜ地方国立大学である福井大学が、世界の教育関係者と協働する必要があるのか？」このような疑問を持たれている方は少なくないと思う。国際的な視点から捉えるならば、持続可能な開発目標 SDGsの一つとして、「すべての人に包摂的かつ公正な質の高い教育を確保し、生涯学習の機会を促進する」が設定されており、本学も含めた世界共通の目標であるといえる。また、本学の中期目標には、「グローバル化に関する目標」が設定されており、大学が目指す方向性とも合致している。一方、これまで教職大学院が大切にしてきた、異教科や異校種といった多様な他者との協働という側面からは、社会文化的背景の異なる世界の教育関係者と協働を行うことは重要である。

その意義が多層的に検討にできるように、国際教職開発部門のメンバーの想いも多様である。「福井大学の研修を受けたアフリカの教育関係者が、帰国後に主体的に実践に取り組む理由を知りたい」「これまでの開発途上国での経験を、福井の教師教育の世界発信に活かしたい」「母語と外国語を一体化した言語

教育を実現するための諸要素について解明したい」

「日本とアラブ語圏の教師教育研修に携わり、教育改革を目指した実践研究をしたい」、それぞれのメンバーの想いは多岐にわたっているが、そこに通底する想いを大切に、アジア・アフリカ・中東・日本を結ぶ教師の専門職学習コミュニティネットワークの構築に取り組んでいる。

2021年4月の部門設置に伴い、国際教職開発部門には6名の専任のスタッフ(三田村、ヤスミン、高阪、高田、王、伊達)と、2名の兼任スタッフ(半原、橋本)が所属することになった。なお、三田村、ヤス

内容

巻頭言	(1)
ミドルリーダー/マネジメントコースだより	(3)
インターンシップ/週間カンファレンス報告	(10)
冬の集中講座	(12)
修了生だより	(18)
図書紹介	(23)
スケジュール	(24)

ミーン、高阪、高田、王の5名は教職大学院の兼任、伊達は教育学部の兼任及び教職大学院の兼担、半原は教職大学院の専任、橋本は教育学部の専任及び教職大学院の兼任である。また、7月からは丸山が加わり、活動を展開している。部門設置時に示された、国際教職開発部門の業務は以下の通りである。

1. 海外現職教員等の教員研修
2. 国内現職教員等の海外教員研修
3. ALT への支援及び連携
4. (独)国際協力機構及び(独)教職員支援機構等外部機関との連携
5. 部門の行動計画の企画・立案・実施
6. その他、必要な業務

これら業務の中から、今年度行った取り組みの一部を紹介する。なお、以下3つの取り組みは外部資金の獲得にも貢献している。

◆文部科学省日本型教育の海外展開(Edu-Port ニッポン):「アジア・アフリカ・中東・日本の教師教育コラボレーション事業」

Edu-Port ニッポンとは、官民協働のオールジャパンで取り組む「日本型教育の海外展開」を推進する事業である。2016年度からパイロット事業として実施している。そこでは、これまで福井大学が培ってきた、5重の専門職学習コミュニティネットワークに着目し、フィリピン、エジプト、マラウイ、ウガンダを重点国として、教員研修のシステム化を目指している。

今年度は、マラウイのナリクレ教員養成大学及びその附属学校と、授業研究の協働実践を行っている。これまでは年数回の渡航による協働が中心であったが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け、Zoomを用いた協働へと切り替えた。そこでは毎週ミーティングを行い、Zoomを通じた授業の見取りや授業の省察、その方向性の検討などを行っている。その結果、継続的に協働することが可能となり、年数回の渡航では分からなかった実践のプロセスに着目することが可能となった。

◆国際協力機構(JICA)課題別研修:「授業研究による教育の質的向上」

JICA 課題別研修とは、JICA が実施する技術協力の一つで、日本側が研修内容を企画・計画した上で、開発途上国に提案し、各国の要請に応じて複数国から研修員を受け入れる研修である。毎年11月、約3週間に渡る本研修では、附属学校を中心とした拠点校との連携に基づき、研修員の実践的な学校ベースの学習を大学院の教育課程に準じてデザインし、アフリカ諸国の教育関係者との協働探究を行っている。これまで参加した研修員は2016年度7名、2017年度13名、2018年度12名、2019年度12名であった。

2020年度はコロナ禍のため実施を見送ったが、2021年度は遠隔で実施している。前回までは研修員が拠点校に訪れることで、協働探究授業に接することや、それを支える組織過程について学ぶことが可能であった。今年度は、遠隔での実施となったため、3つのカメラを用いた授業動画や、公開研究会の1日を追った動画作成などを通し、従来と同様の学びが展開できるよう工夫している。また、遠隔であることの利点を活かし、研修の間にインターバルを設け、それぞれの研修員が教育現場で実践を行う場を設けた。インターバル期間には、各国2回の個別ミーティングを行い、その実践に伴走している。

◆国際協力機構(JICA)草の根技術協力事業:「マラウイ共和国における教師の専門職学習コミュニティネットワークの構築」

草の根技術協力事業とは、国際協力の意志のある団体が、これまでの活動を通じて蓄積した知見や経験に基づいて提案する国際協力活動を、JICA が提案団体に業務委託して JICA と団体の協力関係のもとに実施する共同事業である。本事業では、これまでのマラウイのナリクレ教員養成大学との取り組みを発展させ、ナリクレ教員養成大学及びその附属学校を核として、ナリクレクラスターに所属する周辺の5校を含んだ、教師の専門職学習コミュニティネットワークを構築予定である。

2022年1月—9月までは遠隔で、ナリクレ教員養成大学附属学校における授業研究の協働実践と、ナリクレクラスター5校におけるコミュニティの構築に取り組む予定である。また、2022年10月からは、

マラウイへの訪問や福井大学への招聘と遠隔とのハイブリットによって活動を展開する予定である。

以上のように、国際教職開発部門では、これまで教職大学院が培ってきたことを核として、21世紀の学校教育を担う教員の専門性を高めるために、アジア・

アフリカ・中東・日本を結ぶ教師の専門職学習コミュニティネットワークの構築に取り組んでいる。これらの取り組みについては、実践研究福井ラウンドテーブル 2022 SPRING SESSIONS の Zone D で報告予定である。当日、一人でも多くの皆さんと実践を交流できることを楽しみにしている。



ミドルリーダー/マネジメントコースだより

1年の終わりの贅沢な時間 ～冬の集中講座にて～

学校改革マネジメントコース2年/羽島市立中央中学校 熊崎 敦子

4月に教職大学院に入学してやっと福井の地を訪れることができたのは11月、入学式のようにドキドキしながらカンファレンスルームにたどり着いた。何度かオンラインで一緒になった先生方に直接会うことができ、初めての対面であるのにとっても安心感のある空間であった。物理的な距離はあってもオンラインで語り合うことで、同じような悩みや志を分かち合い、語ってきたことが共有されているからだと感じた。帰り際にLINEを交換し、岐阜に戻ってからも講習会や資格の話、これからこんなことをしたいなど、刺激は続いて有意義な時間だった。

それから1か月後の冬の集中講座は再び岐阜の地での受講となってしまった。「今頃、福井の方も雪で大変だろうな」と思いをはせながら、4月から共に過ごす岐阜の仲間とじっくり振り返る時間もとても貴重であった。

これまでの自分の文章、手書きのノートを振り返る。入学と同時に新調したA4版のノートは裏表紙までメモをしていた。「何が何だかわからない4月のスタートだったな。あの先生は5月にすでにお話していたんだ！分厚い本を読んだな。東京の先生とも話せて刺激になった。夏のまとめは今読むと何を言

いたいか筋が全く通っていない。これからまとめるのだろうか…。」

たくさんの先生方のお名前とご実践があり、そこから考えたこと、思ったこと、ヒントとなる言葉などがメモしてある。刺激になった言葉はマーカーを引き、丸で囲んで目立たせ、そこに目がいくと「そうだった！」と思い出される。自分なりにギュッと詰まったノートになっていて少し嬉しくなった。自分が書いたものであるが、その時の思い、感じたことがまた新鮮なものになって見返すことができた。

ただ、そこから自分のものにするのがなかなかできない。1年の振り返りとしてまとめようとする、まったく筋が通らない。パソコンが進まない時間もあつた。そんな時は、気分転換に周りの先生方に目を向ける。黙々と文章を打っている。そのうち、それぞれがまとめている文章の方向や内容に不安を感じてか、誰となく話し始める。書いていくうちに出てきた疑問、方向性、最近の職場の話など、自然と考えることを口に出して聞いてもらって安心するという時間が生まれた。話すことで共感してもらったり再認識させてもらったり、思考が整理されたりしてま

た文章に戻る。日頃の教職大学院での学びの進め方がそこにもあった。

1年の終わりに1年を振り返り、それだけに時間を費やすという贅沢な時間を味わうことができた。学校生活ではこんなにじっくりと振り返り、考えることは難しい。時間をかけて自分と向き合うことができた。自分の実践の筋はまだ見えてこないが、振り返ることすら時間が取れない日常と比べたら、丁寧

に書き出して自分の1年を見つめることで見えてくるものがあると信じてまた書き出した。

大学院で出会った先生方も同じように取り組んでいるという心強い気持ちが私を支え、自問自答しながら立ち向かった1年がもう過ぎることを実感した。今後も自分の実践が確かなものになるよう、教職大学院の先生方や院生の方と語り合う中で、省察しながら学びを止めない自分でありたいと思う。本当に贅沢で貴重な時間となった。

年頭にふと思ったことなど

学校改革マネジメントコース2年／保善高等学校 三保谷 遼

4度目の緊急事態宣言下に始動した令和3年の2学期は嵐のように過ぎ去っていった。文化祭や体育祭といった学校行事や、100周年記念誌の編纂事業、そして長期にわたる同僚の不在のバックアップ。受験生向けの広報活動もある。その合間にはカンファレンスで福井に2度お邪魔し、全国私学教育研究集会で京都を訪れた。もちろん、毎日の授業の(大げさだが)改革も止めるわけにはいかない。丸山眞男の「『である』ことと『する』こと」や「源氏物語」、白居易「与微之書」では新たな学びのあり方に挑戦し、総合的な探究の時間「未来考動塾」の進化にも心を砕いた。いわば2学期の4ヶ月のすべてが「師走」とでもいうべき嵐のような日々だったのだ。

そして心穏やかに過ごしたいと願いつつ迎えた令和4年。寅年の「山月記」をどう展開しようか、いや、それよりも目の前に控えた3学期の授業をどうしたものか、などと自宅に塾居しながら正月明けのぼんやりとした頭で考えていたところ、ふと思いついた。「あ、いま自分は独りで考えている」と。自宅にいるのだから同僚がそばにいない状態で仕事のことを考えているのは当たり前といえば当たり前だ。では、なぜそんな当たり前のことが頭をよぎったのか。自分で言うのも口幅ったいが、私にとって同僚との協働のなかで仕事を進めることが日常的なものに

なっていたからこそ、「あ、いま自分は独りで考えている」という心の声が発せられたのかもしれない。

職人の集団や個人商店の集合としばしば表現されるように、高校では同僚との協働を意識する機会が決して多くはない。稿者自身、そのような職人(あるいは店主)の一人であったことを教職大学院で学ぶようになってからしばしば痛感させられてきた。そして、そうであるからこそ同僚と協働することを稿者はこの2年間絶えず心の奥底で意識してきたつもりだ。もっとも、その意識が空回りしたり、誤解が生じたりするようなこともあった。いまにして思えば顔から火が出るような出来事も幾度か経験した。協働というキーワードを前に力んでいたのだと思う。しかし、いまの稿者は「あ、いま自分は独りで考えている」と気づく程度には協働が日常のものになっている。この変容の裏に何が起きていたのだろうか。

すぐに思い浮かんだのは、2学期という嵐のような日々を乗り切るために自然と協働する機会が前よりも増えたためだという現実主義的な観点だ。しかし、それだけでは説明がつかないようにも思う。なぜというに、嵐のような日々は、それこそ臨時休校と1度目の緊急事態宣言に象徴される昨年度(ついでに言えば稿者はICTの導入をめぐる嵐のような日々にも巻き込まれていた)にもいやというほど経験してい

るからだ。令和2年の嵐のような日々と、令和3年の嵐のような日々の違いはどこにあるのだろうか。

ひとつ指摘できるのは〈みとり〉の視点だ。たとえば臨時休校中はオンライン学習に象徴されるように、〈みとり〉に限界があった。しかし、いまは全身を使って〈みとり〉に取り組むことができる。子どもたちの心と学びの機微を全身で受け止めることができる。それを同僚とその場で共有することができる。そうして、子どもたちの姿にリアルな刺激を受けた者同士が、よりよい学びの実現に向けて更に協働するようになる。少なくとも冒頭に触れたいくつかのテキストや「未来考動塾」をめぐる実践の裏では、子どもたちの〈みとり〉の共有を積み重ねることで協働性が高まったのではないだろうか。そして、このことは協働に〈みとり〉の共有が欠かせないことを示唆している。

一方に協働が稿者にとっては日常のものになったとしても、課題はまだ残っている。協働そのものが学校全体に浸透していくまでには相当の時間がか

かるだろう。そのためにはより多くの〈みとり〉の共有を経験する必要がある。また、高校ではコンテンツベースの発想がいまなお支配的だ。コンピテンシーベースの発想への転換を協働のなかでいかに実現するかということも考えなくてはいけない。ひょっとすると、「未来考動塾」がそのための思考の補助線になりうるのかもしれない。「未来考動塾」では現在、100周年を迎えようとする本校の歴史を題材とした探究学習「Historia—探究、物語、歴史—」という企画を展開している。校史というのはいささか奇異なコンテンツかもしれない。だからこそ、コンテンツそのものを云々するのではなく、コンピテンシーに着目するきっかけをつくることができるのかもしれないと真剣に考えているのだ。

新年度からはいよいよ「主体的・対話的で深い学び」を目指す新学習指導要領が高校でも始動する。その理念を教師集団の協働によって実現することを目指す「師走」の日々を引き続き駆け抜けていきたい。

遊びの中の学びを見つめる ～学び合う職員集団をめざして～

学校改革マネジメントコース1年／栗東市役所 内田 祥子

今年度4月より教職大学院で学び始めさせていただくことになったと同時に、保育現場から行政に異動し、気がつけば、あと2か月余りで今年度が終わろうとしています。行政での業務内容について理解することに精一杯の日々の中で、新型コロナウイルス感染症の拡大が繰り返されるたびにその対応に追われ、自分自身が考えていた取り組みについては、なかなか実践が進まないような状況でした。そのような中で、毎月のカンファレンスで先生方の素晴らしい実践や思いに触れさせていただくことは、私自身も何とか少しずつでも前に進んでいきたいという気持ちになり、とても大事な時間でした。

少しずつ現在の業務にも慣れ始め、ようやく秋に研修会を開催することができました。各園において、園内研究のテーマには必ず『主体的な～』という言葉を取り入れている中で、改めて主体的な保育について共有し、めざす子ども像に向かう保育展開に繋げていきたいと考え、岸野先生にお越しいただき、『主体的な保育の実践～非認知能力の育成をめざして～』というテーマでご講演をいただきました。2回開催をお願いして、延べ100名の先生方に参加していただくことができ、参加の先生方には、自らの保育を振り返っていただく機会となったことは、一歩実践を進めることができたと思います。具体的な事例を紹介

していただくことで、改めて現在の保育は、子どもの主体性を大切にする保育になっているだろうかということを考えてるとともに、なぜ主体性を育むことが重要なのかということについて再確認することができました。

研修会を行ったことにより、今後は具体的に保育を見合う仕組み作りが必要だと感じています。研修体制を見直し、気構えることなく互いに保育を見合うことで、具体的な場面を捉えて子どもの主体性の育ちを共有していきたいと考えます。また子どもの遊びの姿の中に『学び』があることをどのように具現化していくかという点についても職員の共通の『学び』となるように取り組む必要があります。

行政の立場となり戸惑うことばかりでしたが、保育現場ではできない、行政にしかできないことがあるはずだからという励ましの言葉もいただき、それがどんなことなのか、自分なりに考えてきました。そして今、保育現場が何を必要としているのかを知り、各園の取り組みを支える仕事こそが行政の役割なの

だということがぼんやりと見えてきました。保育の質の向上のために、子どもについて、また保育について語り合う時間がとても重要だということが分かっているにもかかわらず、勤務している時間は常に保育にあたっており、その時間を見出すことができない状況があります。どのようにタイムマネジメントをしていくのか、保育者のノーコンタクトタイムをどのように見出すのか、ICTの導入を図りながら園の業務改善を同時に進めていくことが必要です。

今年度、思いばかりで実践が進んでいない状況ですが、今後に向けて ①保育を気軽に見合うことができる研修体制の構築 ②園内研究主任の会議（語り合い）の設定 ③園内外をつなぐコミュニティの形成 に取り組んで行きたいと思えます。これからの未来を生きていく子どもたちにどんな力をつけたいのか、そのために保育者自身もどのような力量が求められるのか、職員集団も子どもとともに学び合える環境作りを進めていきたいです。

誰一人取り残さない～教育における「公正さ」とは

ミドルリーダー養成コース2年／富山県立魚津工業高等学校 伊井 昌彦

「公教育」という言葉を我々は使う。「公平な」教育、「公正な」教育。

第5学年及び第6学年道徳の『学習指導要領解説』によると、公平とは、「偏りやえこひいきのないこと」、公正とは「正しい（とされる）こと・社会の秩序維持に適うこと」とある。我々は公教育において公平さをいたずらに意識しすぎるあまり、公正さをないがしろにしてきたのではないか。社会の秩序維持のために教育が果たす役割が、誰一人として取り残さないことであれば、公教育の役割は、その一人一人に社会の一員として学びを保障することに他ならないのではないか。

去る7月8日に臨時職員会議が開かれ校長からおおむね以下のような話があった。県教委から来年度

生徒定員数に関する内示があり、本校の機械科が1クラス（40名）の減となるとのことであった。中学3年生の卒業生数が県下でマイナス127となること、特に魚津市で32名減少すること、工業科の再編は今までなされていないことが主な理由として述べられたが、他の先生方にとってもそれは全く青天の霹靂であったようだ。

会議室は異様な雰囲気にも包まれた。現在1学年は機械科2クラス・電気科1クラス・情報環境科1クラスの計4クラス160名から構成されている。今年度の1学年は全学科定員割れしていることも影響したのかもしれないが、いずれにしろ生徒40名の定員削減は教員数の削減と同義であり、ひいては学校全

体の活力の減退をもたらしてしまう極めて重大な問題だ。

政策の理念や方向性が現場の実態とうまくすり合わないことは多くある。県立高校に勤務する教員として公教育の役割を考えるとともに、自身の実践の方向性について考察を深めたく、7月下旬の夏期集中講座では教材にデボラ・マイヤー著『学校を変える力 イーストハーレムの小さな挑戦』を選んだ。

著者は最終章において、それまで積み重ねてきた章立てを振り返るように、歩みは失敗と忍耐の連続でしかないことを述べている。そもそもその歩みに終わりではなく「どうすれば（公教育に）変化を生み出すことができるのか、その答えを見つけられずにいる」「事態はますます複雑になっている」とも述べている。著者はアメリカ社会の現状について、相変わらず人種差別や卑劣な言行が横行していると悲観的に見ている。

一方で、人間の未来創造、可能性を模索できる無限の力について言及し、未来は学校改革をめぐる議論に保護者や教師がどれだけ深く関わることができるかにかかっていると述べている。（以下引用）

「どうすれば変化を生み出すことができるのか、その最後の答えとなる1ピースをいつも見つけられずにいる。しかし、ひよっとしたら明日にもそのピースがはまる場所が見つかるかもしれない。ただ、パズルの形は常に変化している。だから命ある者はすばらしい。予想通りにいった試しはない。未来はいつも期せぬ出来事に満ちている。」

印象的なのは、著者の未来へのまなざしである。不確実性や変化を受け入れ進むことにこそ価値がある。それは失敗と忍耐を超え実践を積み重ねてきた著者の信念そのものだろう。国や地域、時代こそ違うものの、教育に託された役割は未来社会の創成であり、その社会を担うのが子どもたちである。従来の教育現場や行政に不確実性や変化を乗り越えるだけの資源が見込めないならば、少なくとも子どもたち一人一人が持つ潜在的な力を伸ばすことが我々教員に求められるだろう。公教育は子どもたちの生きる力を育み社会の未来を創ることではじめてその公正さを保つことができるのではないだろうか。

コロナ禍での「学び」と「出会い」に感謝

ミドルリーダー養成コース1年／二松学舎大学附属柏中学校・高等学校 向阪 望

福井大学教職大学院に入学をして、間もなく1年が終わる。心配されていた新型コロナウイルス感染拡大の第6波が到来し、日本全国各地で感染者数の過去最多が毎日更新され爆発的に感染が広がっている。学校現場も再びコロナ対応に追われ、周囲の学校では臨時休校や学級閉鎖が行われている。行事の延期・中止も余儀なくされ教育活動もここ2年間で変化した。生徒たちの「学び」を止めないように、学校現場は日々奔走している。

私は「東京サテライト」が開設された2年目の入学生である。東京サテライトでの学びは、「板橋区教育

委員会」を研修会場とする対面形式と、コロナの感染状況によりZoomでのオンライン形式の両方を併用する形である。夏期集中Cycleにおいて、Cycle1はM2の三保谷先生の勤務校である保善高等学校にて対面形式で実施できた。1年延期となっていた「2020東京オリンピック」の開会式が数日後に迫っていた日であり、ブルーインパルス飛行を見ることができたのも1つ思い出である。Cycle2は沖縄県宮古島市において、「宮古島ラウンドテーブル」の実施も兼ねて、宮古島の先生方と共に新しくなった宮古島市役所で行うことができた。しかし、私たちが宮古島に滞在していた時に「第5波」が到来していた。現在のよ

うに日を迫うごとに感染者数が増加し、宮古島でも過去にない感染者数となった。何とかCycle 2は終了し、翌日ラウンドテーブルを行うその夜、中止が決定された。企画・運営・準備を進めてきた関係の先生方にとって苦渋の決断であった。宮古島研修が終了した後に宮古島市では爆発的に感染状況が広がったことを考えると、結果として中止の決断は正しかったと私は思う。この時のことを振り返ると、学校現場における管理職の先生方の決断力には頭の下がる思いである。本校でも2月に実施予定であった校外学習や宿泊行事の中止が決定される中、担任団の思いとしてはまだ一度も学校行事を経験していない生徒に「何とか実施してあげたい」という生徒や保護者の気持ちに寄り添ってしまう。学校としては、生徒・保護者の思いはもちろんのこと、安心・安全に実施する「危機管理意識」を持って決定しなければならない。だからこそ、校長は断腸の思いで決断をされているのではないかと感じた。今年度、宮古島ラウンドテーブルを実施出来なかったことはとても残念であるが、教員としてたくさんのことを学ぶことができた。

第5波が収まり、感染者数が下火になってきた11月、東京サテライトが中心となって「東京サテライトラウンドテーブル」が実施され、Zoomによるオンライン開催となった。コアメンバーとして運営に関わったが、学校業務との兼ね合いであまりお役に立てなかったことが心残りである。北海道から沖縄までの全国各地から参加をして下さり、新たな出会いも

あった。松木先生のご講演から学んだこと、参加された先生方から学んだことも多かった。また、普段はオンラインでカンファレンスを受講する側であるが、東京ラウンドテーブルではZoomのホスト側として運営した。オンラインの心配事として接続の問題がある。また予期せぬ事態も起こる。今回東京サテライトのメンバーは、板橋区役所の研修室に集合した。そのおかげで、オンラインのトラブルもすぐに解決することが出来た。自分1人だけだったらと思うと、すぐに解決出来なかったかもしれないと思った。「オンラインの良さ」と「対面形式の良さ」が感じられた1日となり、月間カンファレンスなどにおいてZoomのホストや準備をしていただいている大学院の先生方に改め感謝をしたいと思う。

そして冬期集中 Cycle は「長期実践研究報告」について取り組んだ。コロナの状況では2021年度東京サテライトのメンバーで、対面形式で学び合うのが最後になってしまう。どこか寂しさを感じながらM2の先生方が書かれている長期実践研究報告を拝聴し、自身の2021年を振り返る機会となった。

2021年度は「長期実践研究報告会」と「福井ラウンドテーブル」を残すのみである。「コロナ禍」により様々なことがあったが、教員としてたくさんのことを学ぶ機会となった。そしてこの1年間に出会ったすべての方々に感謝をし、2022年もたくさんのことを学んでいきたいと考えている。

教職大学院での学びと併せて

ミドルリーダー養成コース1年／南越前町立河野小学校 佐々木 清文

「やってみせ、言って聞かせて、させてみせ、ほめてやらねば、人は動かじ。」という言葉、昨年度末のNHK 特集ドラマを見て思い出しました。「話し合い、耳を傾け、承認し、任せてやらねば、人は育たず。やっている、姿を感謝で見守って、信頼せねば、人は実らず。」と続きがあるそうです。また、同局の大河ドラマで知った、「至誠にして動かざる者は 未だこ

れ有らざるなり」という言葉も一緒に思い出しました。いつもではありませんが、大河ドラマを始めから終わりまで欠かさず見ることがあります。両方とも、人を動かすときの教えだと思います。これらにナッジ (nudge) の手立てを併せて、子供たちを動かそうと仕事をしています。

「主体的・対話的で深い学び」のために、授業改善をどのようにすればよいか考えなければいけません。子供のころに経験した授業や教員になり作ってきた授業から、解放されることはまずないと思います。そこで、教職大学院で学べば自分自身が学習者になり、学びを生かす授業者になれると考えました。学習者と授業者の視点で「主体的・対話的で深い学び」と向き合うことができると考え、とにかくやってみることにしました。口先で教えるのではなく自ら行動して学ぶことによって、教師の仕事に誠実に取り組もうと考えました。言ってみせるというよりは自分で考えられるようにヒントを出したり、できなかったら選択肢を出して支援する言葉をかけたりして、子供の状態をよく観察して学習を促します。その後はもちろん、させてみせて少しでも出来たらほめることを忘れていません。

さて、教職大学院での学びと併せて、経験できた（やってみた）ことを振り返ります。

一つ目は、ニュースレターを読むことです。今年度の入学で前年度の最後から読み始めましたが、掲載されている皆様の熱く深い想いを感じることができました。また、発行のスタイルが変わったとのことですが、単なる広報誌ではなく実践の歩みを省察して表現されていることに驚きました。さらに、ニュースレターやカンファレンス、長期実践報告の意味を、オンラインでも説明がありましたがここでも知ることができました。

二つ目は、特別支援教育ゼミを受講したことです。特別支援学級の担任をしていて、特徴ある子供の行動や自分の実践の悶々としていたことについて、受講して話し合う中で整理できたところがあると感じています。セミナーの時に「ダイナミック」に実践するとよいと助言を受けたので、子供と一緒に本校に70近くあるツバメの巣の写真を撮り、A6サイズで教室前廊下に掲示しました。それを見て表現が苦手な子が、ワープロで写真の説明をどんどん作っていったときは驚きました。このことを、カンファレンスで話題にしたときに、「ダイナミック」に実践することとはどういうことか質問を受けました。この実践がそれに当てはまるのかなと考えたり、説明文を書くためのナッジの手立てにならないのかと思ったり自問自答することになりました。

三つ目は、公開講座やオンラインセミナー、てつがくカフェに参加したことです。教職大学院に入学しなければ、[福大 portal お知らせ]を見ることもなく参加することはなかったと思います。それぞれに参加して、学びの内容は難しく感じましたがわくわくすることができました。

県の感染拡大警報、大学入学共通テストと事件、海外の海底噴火と広域の津波警報、全国的な大雪がニュースになっている中で、教職大学院のスタッフの皆様にお世話になっていること、心から感謝申し上げます。



インターンシップ・週間カンファレンス報告

学びをつなげる

授業研究・教職専門性開発コース1年/福井市至民中学校 窪田 真一

「学校で音楽を学ぶ意義とは何なのか」これは私が大学院に入学して以来、自分の中で持ち続けている問いである。私自身、日常生活の中で音楽に触れる機会が多かったにも関わらず、学校の音楽の授業に対して意欲に溢れ積極的に参加しようとする生徒ではなかった。むしろ音楽の授業に苦手意識を抱いていたのかもしれない。実際にインターンで子どもの姿を観察するようになり、「音楽の授業は休み時間だ。」や「音楽を聴くのは好きだけど、学校の音楽の授業は嫌い。」といった生の声も聞こえてくるようになった。子どもの素直な思いを聴くことができる関係を築けたことで、音楽の授業の在り方について考え始めるようになったと振り返る。

そのうち、〈子どもが興味をもって楽しく参加できる授業〉について考え始めるようになった。しかし、どのように考えて良いか糸口が見えず、学部時代の教育実習での経験から〈子どもの生活と結びつく題材〉を用いた授業をつくることを最初の目標に設定し、なんとか進めていこうとしていた。そのとき、至民中学校の国語科の先生より合科学習のお誘いを受けるという貴重な機会をいただく。それは、『平家物語』の朗読をより深めるために音楽科の学習で効果音を付けてみないか、というものだった。インターネットやタブレット端末の普及により、YouTube や TikTok など動画を視聴している子どもが多い。その影響もあり、動画の中で効果音を聴くことも多いと予想される。しかし、子どもたちはたくさんの動画を見ているが、内容に集中するあまり効果音を気にしていないのではないかと考えた。それらを踏まえ、

〈身近な音楽体験を活用した授業デザイン〉を目指して国語科との合科学習に取り組み始めた。

インターンにて合科学習を計画するのと同時期に、金曜カンファレンスではインターンでの子どもの姿を通して〈身に付けさせたい力〉を設定し、その力の育成を通して社会を創る力を培うカリキュラムを構想していた。私は〈表現する力〉を設定したが、〈表現する力〉に焦点を当てたのは表現することが他者とのコミュニケーションで不可欠だと考えたからである。特に音楽科では、音を主体として授業を展開していくため視覚的に捉えることができず共通の理解が図りにくい。授業の中で子どもが体験を言語化したり音や音楽を通して表現したりする機会はあるが、表現することを恥ずかしがったり躊躇ったりしてしまうような環境では十分な活動を展開することは難しいだろう。さらに、自分の思いや感じたことを表現することで他者と関わるだけでなく、他者とのやり取りを通して自己を見直すきっかけにもなるため、表現しようとする意欲を育む方法についても考えていくことが重要になる。そこで、教師は子どもが幅広く音楽と関わることを設定し、子ども自身が知覚と感受を通して自らの経験を価値付けていけるよう働きかけていくことが大切だと考えるようになっていった。

〈表現する力〉について金曜カンファレンスで考えたことを踏まえ、至民中学校での合科学習に取り組んでいった。特に、朗読（声による表現）と効果音の創作（音による表現）という2つの視点から〈表現する力〉について国語科の先生方と共に考えることが

できた。『平家物語』での合科学習に入る前に、音楽科だけで『桃太郎』の朗読を用いて効果音の創作を行った。最初は川から桃が流れてくるシーンとお婆さんが桃を割るシーンの2ヶ所に効果音を付ける活動に取り組んだ。子どもたちは川の様子や桃太郎が登場するシーンについて想像を膨らませ効果音を付けていたが、朗読はたどたどしく、表現にまだまだ伸び代がある様子だった。しかし、『平家物語』に活動が移ると子どもたちの様子が一変した。国語科の先生方は子どもたちが飽きないように手を変え品を変えて働きかけ、子どもたちもそれに呼応するように読み方や声のトーン、効果音を鳴らし始めるタイミングなど試行錯誤しながら工夫を凝らし始めた。その結果、『桃太郎』の時に見られた発表を躊躇う姿は影を潜め、子どもたちはクラスメイトの前で自信をも

って堂々と発表していた。子どもたちの変化を間近で見ることができた貴重な実践になった。

これまでの実践や金曜カンファレンスでは〈表現する力〉の育成を通じて〈学びをつなげる〉こと、特に音楽科では子どもの〈生活の中の音楽〉と〈学校の中の音楽〉をつなげることを意識してきた。しかし、国語科の先生方との実践から学校の中で〈学びをつなげる〉ことで子どもたちが意欲を持って学習に取り組むことができるのだと気付かされた。今後は、公教育として音楽を学ぶ意義について考えるとともに、子どもたちが自信をもって表現できる授業や子どもたちの活動を勇気づけられる評価の在り方について研究していきたい。

楽しく学びの深まる授業とは

授業研究・教職専門性開発コース1年/福井大学教育学部附属義務教育学校前期課程

五十嵐彩香

教職大学院に入学して、早くも10カ月が経った。大学院では、週に2回のインターンシップや週間カンファレンス、数学の授業があり、実際の学校現場と大学院での理論と実践を往還しながら学びを深めている。昨年春のニュースレターの自己紹介文では「楽しいだけの授業ではなく、楽しく学びの深まる授業をするには何が必要なのかを実践を通して考えていきたい」と記述した。この10カ月間で学校現場でのインターンシップ、大学院での週間カンファレンス等を通して、そもそも「楽しく学びの深まる授業」とは何なのかについて考えてきた。そこで本稿では、学校現場で感じた子どもの実態を基に、週間カンファレンスで院生や先生方との関りを通じて考えた「楽しく学びの深まる授業」の在り方について述べていきたい。

まず、インターンシップでの子どもの見取りについて述べていく。私は、附属義務教育学校前期課程に

配属となり、基本的に5年生の授業観察や、授業実践を行っている。算数の授業実践をした際に、グループワークを取り入れたところ、子ども達の柔軟な発想法に驚かされ、次はどんな面白い発想をするのだろうかワクワクしたが、その一方でどこか違和感を覚えることもあった。当時は、このように児童同士の話し合いによって、柔軟な考えが飛び交う様子を学びが深まっていると捉えていたが、改めて当時の様子を振り返ると、子ども達は自分の考えを伝え合っているだけなのではないかと考えるようになった。佐藤(2018)の「学びの共同体の挑戦—改革の現在—」では、「グループ学習=話し合い」あるいは「グループ学習=教え合い」と短絡的に捉えられていると述べられている。また、「話し合い」は既知の事柄の交流であるが、「学び」は未知の事柄の探究であり、「教え合い」はそれ自体が一方的な権力関係であり、できない子は、先生や仲間たちが教えてくれるのを「待つ

子ども]になってしまうとも述べられている。前述したように、自身の授業実践において、子ども達はグループワークで自分の考えを伝えていただけであり、これは「学び合う」のではなく「話し合う」子どもの姿だったのではないかと思に至った。この経験を踏まえ、私の言う「楽しく学びの深まる授業」とは、「話し合う授業」でもなく「教え合う授業」でもなく、「子ども達が対話を通して学び合う授業」ではないかという思いが強まった。どうしたら子ども達は「対話を通して学び合う」ことができるようになるのだろうか。私はこの問いについて、課題の設定が1つの鍵になると考えた。そこで、次に週間カンファレンスでの学びについて述べる。

週間カンファレンスでは、インターンシップで見取った「目の前の子ども達に必要な力」を基に、社会を創る力を培うカリキュラム構想を練っている。私は、今の子ども達には他者との話し合いではなく、対話をした上で「自ら判断する力」がこれから重要になっていくと考え、この力を身に付けることができるような指導案を作成してきた。具体的には、答えが1つに定まるのではなく見方によっては答えが変わる課題を設定するというものだ。この課題に対して、子ども達が対話を通じて、他者の意見も踏まえながらよりよい選択をすることで「自ら判断する」ことがで

きるような授業作りを意識してきた。私は数学を専門としているため、見方が偏ってしまうことが課題であった。しかし、この週間カンファレンスでは異学年・他教科の院生と対話しながら指導案作りを進めてきたため、自分では気づかなかった視点からの指摘もあり、指導案やワークシート作りにおいて沢山の学びを得ることができた。さらに、自身の指導案を基に先輩方と評価の在り方についても考えてきた。今回、私が必要だと考えた力は、算数・数学科の授業だけで身に付けることができるものではない「普遍的な力」である。それは、たったの1時間の授業だけで身に付けることができるものではないため、長い時間をかけて最終的に子ども達がどのように変化したのかを評価することが大切であることに気付いた。算数の問題を解くことができるかという「知識・技能」の評価は、ペーパーテストで測ることができる。しかし、他者との対話を通じて「自ら判断する力」はペーパーテストで測ることはできない。点数で表すことのできない力は、どのように評価する必要があるのだろうか。まだはっきりと答えを出すことはできていないが、点数で表すことのできない力を評価することも教師として大切な能力である。今後も院生や先生方と対話を重ねて評価の在り方について学んだ上で、実際に「楽しく学びの深まる授業」を実践し、評価を行っていききたい。



冬の集中講座

トライ&エラー 1年を振り返って

学校改革マネジメントコース1年/沖縄県宮古島市立狩俣小学校 下地 美和子

今回の冬季集中講座サイクルでは、3日間にわたって、実践報告づくりを進めていく為に、これまで取り組んできたことを捉え直し、何が重要か、つかみ直し

て表す活動で、私にとっては1年を振り返るとても大切な時間となった。

4月当初、私は「地域に開かれた学校」を目指して、理想を高く掲げ、地域と連携しながら、地域人材バン

ク作成や教材開発、探究学習の実施を考えていた。前年度からの取組で地域とのスムーズな連携は出来ていたが、授業での地域探究学習については足踏み状態であった。課題として①総合的な学習の時間のテーマと計画が不十分②職員の探究学習に対する不安（戸惑い）③私自身がこれらの課題を解決するための体制づくりがあげられた。そこで地域に連絡を取ったり、自ら足を運んで調整を行ったりして課題解決を試みた。自分一人でなんとかやらないといけないという思いからすぐ行動に移していた。しかし、「組織の中のプレイヤーになっている」という福島昌子先生の助言を受け、改めて自分の役割は、組織をマネジメントすることなのだ気づかされた。そこで、組織の中のマネージャーとして全職員で探究学習についての研修会を開き、全体計画を練り、テーマについて話し合った。

そういう中で、組織の中のマネージャーとしての自分の役割を強く認識し実体験する好機に恵まれた。それは福島昌子先生と大学生のサポートによる地域の海をテーマにした探究学習「海プロジェクト」であった。

子ども達は、インタビューには「事実」と「思い」の違いがあることを学び、地域の伝統漁「追い込み漁」を見学し、漁師さんにインタビューを行った。その活動を通して子ども達が「事実としての海」と「意味としての海」の双方の見方を知り、ただ「きれいな海」として考えていた海を「狩俣の財産」として理解する中で、価値観のとらえ直しが起こり、地域に愛着を持つようになった。子ども達は「なぜ漁師さんはそう思うのか?」「どうして?」と『考える』ことで、自分事としてとらえ、狩俣の海の価値づけを行っていった。また、子ども達のインタビュー「狩俣の海は、あなたにとってどのような存在か?」という問いに対しての自問自答や、報告会での追い込み漁の価値づけを見て、関わってくださった漁師さんの中には自分自身の漁師人生を振り返り涙ぐむ方もおられた。

地域と学校の互惠関係の協働的な学びもでき、子ども達にも「もっと海に行って生き物を調べたい」「次は自分も追い込み漁の見学をしたい」など主体

的に生き生きと取り組む姿が見られ、先生方の集団としての協働体制もよい方向に変化してきたことを実感した。改めて、自分の役割が組織の中のマネージャーであることを強く認識した。

その事によって、組織の中のマネージャーとして教師や子ども達が学ぶ環境の整備や、学校全体で取り組むための体制づくり、探究学習への教師の思考の切り替え、自然を対象にした教材化の難しさ、外部との調整等の課題が見え、それを解決するには、職員と共に協働体制で進めていく事の大切さに気づいた。「自分に何ができるのか」「なぜ?」「どうして?」「どうすれば?」と問いをもって課題に向き合う中で、斎藤喜博氏の実践記録にあった「職員への情報共有」を真似てみたり、職員が探究的な学びを目指すためにはどうしたらいいかなど自分に出来ることを取り組んでみたりした。しかし職員の初めての事に対する不安の払拭や、職員一人一人の考えを大切にしながら、一つの方向に向かっていくことの難しさも感じた。私自身も前に進むことをためらったり、立ち止まったりしたこともあった。

そういう中で開かれた、冬季集中講座サイクルの資料の中にある「社会人基礎力」の基礎的な能力は『前に踏み出す力(アクション)』『考え抜く力(シンキング)』『チームで働く力(チームワーク)』、そしてTOYOTAの「世界への責任、未来への覚悟」が目飛び込んできた。「試行錯誤しながら、失敗を恐れず、自ら、一歩前に踏み出す行動が求められる。失敗しても、他者と協力しながら粘り強く取り組む事が求められる。」とある。基本的なことであるが、本当にとっても大切な事だと感じた。今ある学校の課題に向けて、院の学びをヒントにしながら、自分事としてとらえることや情報の共有、信頼し合うこと、そして失敗を恐れず前へ進む事の大切さを改めて感じた。

今年1年間を振り返って、当初プレイヤーとして動いていた私は、学校の課題解決に向けて、組織を動かすマネージャーが自分の役割であることに気づいた。そしてその立ち場で研究を進める事が重要であることを実感した。これからも迷ったり、悩んだりすることは多々あると思うが、しっかりとした理論を

示してくれる教職大学院で学べる事に感謝しながら、組織の中のマネージャーとして実践・省察し、今後トライ&エラーで研究実践を進めていきたい。

教育とは

ミドルリーダー養成コース1年/金沢高等学校 村上 孝有

福井大学の大学院に入学して、10ヶ月が経過した。知人の先生に誘われ半ば勢いで入学したが、毎月のカンファレンスや集中講座に参加し、様々な立場の方と意見を交わすことを通じて、価値観や物事の捉え方が大きく変化した。冬の集中講座では、1年間のカンファレンスのレポートを見直し、自分の考えがどのように変化したのかをまとめた。ここではその一部を抜粋した。

金沢高校に勤務して13年経過したが、高等学校の先生以外と教育に関する話をする機会は殆どなかった。年度当初は「高等学校以外の先生と話をすることで得られること」のイメージがあまり沸かなかったが、今では月に1回のカンファレンスでの発見がその後の教育活動に大きく影響している。特に幼児教育に携わっている先生方とカンファレンスを共にし、意見を交わすことが出来たのは、自分にとって大きな転換点となった。幼稚園や保育園にはテストや通知表が無い。先生方は園児や学級の様子を常に観察し、子ども達の成長に合わせて柔軟に、教育活動を改善させていた。一方、私は日々の教育活動において「成績を伸ばすこと／志望校に合格させること」を最も大切なものとして考えていた。もちろん、私立の高等学校の教員である以上、結果は常に求められる。どれだけ生徒が授業に意欲的に参加したとしても、学力が身につかなければ、評価されることは少ない。しかしカンファレンスを通じて、成長とは数字だけに現れるものだけでは無いことを、改めて気付かされた。「生徒の成績」ではなく「生徒自身」にどれだけ目を向けていたかと言われれば、反省すべき点が多い。

同様に、今までの教育活動を振り返ると手段が目的となっていたことが多かった。様々な授業実践を行っても、しっくり来るものが少なかったのは、目的への意識が不足し、表面的な部分でしか捉えられていなかったからであろう。日々の授業、学級経営、部活動指導全てにおいて「何のために、誰のために」その教育活動をするのかを心がけて計画を立てていきたい。

この一年間、改めて考えるようになったのは「教育」とはなんだろうか、ということである。漢字からそのまま理解するのであれば「教えること」「育てること」であるが「教える」「育てる」とはいったい、どういうことなのか。今はまだ、言葉に出来ない部分が多い。自分が今まで、どのような教育を受け、どのような教育を提供し、今後どのような教育を提供したいのか、長期実践報告を作成しながら、カンファレンスを通じて自分自身と対話していきたい。正直な所、長期実践報告の作成に対しての不安は募るばかりである。もともと文章を書くことは苦手であることに加え、自分の教育に対する考え方は浮き出るばかりで、考えれば考えるほど何を書いて良いのかわからなくなっている。しかし、決して悲観的になっているわけではなく、むしろ多くの問題点、改善点が見つかったことに自分の成長を感じている。福井大学に入学したのも、今の教育活動に対して行き詰まりを感じたからであり、自分の成長につながる悩みであると確信している。今後も、自分の経験や高等学校の枠にとらわれずに、様々な刺激を受けながら、教育活動を展開していきたい。

自分と向き合う3日間～冬期集中講座を振り返って～

ミドルリーダー養成コース1年/立教女学院中学校・高等学校 堀井 優

東京サテライトでは、冬期集中講座は板橋区役所研修室にて対面で実施された。4月からこれまでのカンファレンスや夏期集中講座では、その都度課題をいただいたり、課題となる本を読みながら考えたりするような時間が多かったように思う。しかし今回は長期実践報告に向けて、初めてじっくり自分を見つめ直す機会をいただいたと思っている。ゆっくり考えたいと思っても日々のことに追われてしまうと、時間をかけてじっくり人生を振り返り考えることは難しいものである。このような機会をいただけるのは大変ありがたいと感じた一方で、正直なところ少し怖さもあった。夏期集中講座でも、自分を振り返ることがあったが、新たな視点で自分を見つめることはなかなか苦しい時間でもあったからだ。今回、長期実践報告の大まかな目次を立て、自分の教員人生だけでなく一人の人間として振り返り、見つめ直すことにした。

結果的にこの3日間は、自分の小学校時代まで遡り、教師人生の中でターニングポイントとなっている出来事や今の自分に影響を与えていることを思い出す作業の3日間となった。同じグループの先生方にアドバイスをいただきながら目次と睨めっこし、項目の入れ替えを何度も行い、どのような流れで展開すべきかを考えた。振り返ってみることで自分が教師として、一人の人間として大切にしているポイントが見えてくるようになった。これまで自分がなぜそのような行動に出ていたのか、掴み切れていなかった部分や、モヤモヤしていた部分が明確に

なり、改めて気づくことができたことも多かった。集中講座初日の柳澤先生からのお話が改めて腑に落ちた。

一番大きな収穫としては、自分の教員人生の転換期に気づくことが出来たことである。夏期集中講座では、“「止まる」時間はさらなる深い学びへの誘いである”という『福井発プロジェクト型学習』の一文に、自分の授業を照らし合わせて振り返ることができた。そして今回は、自分の目指す教師像と現実のギャップに悩んでいた時期が、自分の人生の中での「止まる」時間だったということに、さらに俯瞰して捉え直すことが出来た。私は今、教職大学院という環境に身を置き、素晴らしい先生方とともに学び合えることで、「止まる」時間からさらなる深い学びへと進もうとしているのだ。今回も様々な先生方との対話を通して、新たな気づきを得ることが出来た。離れた地域に住む先生や、様々な立場で教育に取り組んでいらっしゃる先生方との対話は単純に明日への活力とエネルギーになる。この教職大学院の先生方と学ぶ時間は、とても刺激的で有意義な時間であり、私にとって人生の中で大切な時間となっている。気づけばいつの間にか、大学院生活も折り返し地点が見える所まで来ている。1年後は本格的に長期実践報告を提出する時期であり、その頃までに自分がどのように変化するのかを楽しみながら、教職大学院での学びの時間を大切に過ごしたい。

冬期集中講座に参加して

ミドルリーダー養成コース1年/岐阜聖徳学園大学附属小学校 山崎 優

1 2月史上最強寒波の到来。そんな言葉がテレビから聞こえてきた冬期集中講座のスタートでした。高速道路通行止めのニュースもあり、「福井の雪は大丈夫なのだろうか」と気になりながら家を出発しました。雪の降る中、岐阜会場である岐阜聖徳学園大学のキャンパスへ向かう道中では、教職大学院に入学してからの日々を振り返りながら車を走らせた。

3日間の集中講座では、自分の実践を振り返り、記録に残していくことが中心でしたが、「省察」することの意義を改めて感じることでできた3日間となりました。1年前の今頃は教職大学院へ向けた準備をしており、その頃に志していた自分の研究テーマと今感じている研究テーマが大きく変わっていることに気づきました。教職大学院での学びと日々の実践をつなげ、目の前にある課題が変わってきていることに目が向けられてきたのだと思います。同時に、1年前には気づけなかった多くの点に目を向けられる自分がいることにも気づきました。教職大学院で学ばせていただいていることが、気づかないうちに少しずつ自分の力となっているのだと感じました。

一番の大きな気づきは、「組織」について目が向けられるようになったことです。学級担任が長い自分にとっては組織に目を向けるよりも自分の授業実践や学級経営にどうしても目が向いてしまっていました。しかし、この3日間で入学してからの日々を振り返ると、自分の事だけでなく、「組織」に目を向けて

いました。教職大学院でたびたび話題に上がる「協働的な学習」「探究的な学び」には組織運営は切っても切れないものだと感じました。学級の組織も学校組織も同じ事が言えるのだと思います。自分のカンファレンス後のレポートを見返してもその都度同じ事が書いてあり、校種の違う先生方との語り合いの中でもそのように感じていたのだと、振り返ることができた3日間でした。

3日目のクロス・セッションでは校種の違う先生方の実践をお聞きすることができ、とても多くの刺激をいただきました。一人20分程度と限られた時間では語り尽くせないほど、どの先生方の実践も聞き入ってしまいました。また、その語りからは先生方の実践する姿を想像することができました。自分の思いや考えを熱く語り、またそれを受け入れ、助言や指導をいただけるこの環境が、子どもたちの学びにもつながるのだと改めて感じることでできた時間でした。

1年前には想像もしていなかった自分の姿に驚き、1年後どのように自分が変化しているのかが楽しみになった3日間でもありました。この原稿を執筆している現在、新型コロナウイルスの感染拡大が続いており、先行きがまた分からなくなってきました。1年後どのような状況になっても、1年を振り返ったときに多くの気づきを得られるような実践を積んでいきたいと思っています。

全ての子どもが学べる授業づくり

授業研究・教職専門性開発コース1年/岐阜聖徳学園大学附属小学校 古田 悠人

私はこの冬季集中講座で今後のテーマを明確にすることができた。そのテーマとは、「社会科における合理的配慮を取り入れた授業作成」である。

私は4月からの1年間で2つのことをテーマとしてきた。1つは気がかりな児童へのアプローチの仕方、もう1つは授業の質の向上である。

まず、1つ目のテーマに関して、インターンシップを通して、私自身気がかりな児童にどのようにアプローチをしたらよいか悩む時が非常に多かった。授業に集中できずにいる児童にどのように声をかけたらいいのか、児童の間でトラブルを起こしてしまう児童になんて声をかけたらいいのか、などと悩んでいたことで課題意識となった。

このような課題を持ち始めてからは自分なりに気がかりだと思う児童をピックアップし、その児童の行動や、行動が起きてしまった原因を自分なりに分析していた。

2つ目のテーマに関しては、この1年間で多くの授業をやらせていただいた。社会に始まり、算数や、国語、体育など20時間近くもの授業を実践させていただいた。

ただ、自分が納得するような授業は一切できず、課題ばかり出てきた。出てきた課題として、①活動が手段ではなく目的になってしまった ②子ども主体ではなく教師主体で授業が進んでしまう ③発問が端的ではない ④課題が教師から与えられたものになってしまう、などが出てきた。私の教材研究が足りなかったことなどもあり、授業を行うことに一杯一杯になってしまっていた。

この2つのテーマに関して振り返ってみた時に、当初は全くの別物のテーマだと感じていたが、実は

つながっていることに気づいた。気がかりな児童のアプローチを考えていくうえで、授業は外せないものである。授業の中で置いていかれる児童がいてはいけない。私はこの思いを強く持たないといけないと1年間授業をやらせてもらって感じていたこともあり、それならば、気がかりな児童の特性を考慮した授業をデザインしていけばいいのではないかと考えた。また、夏季の集中講座でデボラ・マイヤーの「学校を変える力」の振り返りを読み返してみて、デボラ・マイヤーは民主主義という観点から「公教育」を大切にしていた。なぜ、公教育がなくなるといけないのか。それは、私立の学校では、簡単に言えば富裕層の子供を集め、エリートを育てていく教育で、負け組は切り捨てられてしまうというように、民主主義からかけ離れてしまうのである。著者は学校を「考えることの素晴らしさをすべての子供が経験できる環境」と述べている。私はこの思想が大好きである。夏の集中で「学校には学びについていけない児童が少なからず存在していると思う。そういった子にもしっかり目を向けて学びを提供したい」と記述していた。この夏の自分の考えを見ていたら、この学びを提供する手段が授業であると改めて感じた。

このような授業をするためには教科に関することはもちろん、特別支援教育に関する知識が必要となってくる。児童の特性の把握も必要となってくる。まだまだ私には足りないものばかりであるが、この教職大学院を修了するまでには今掲げたテーマを実践することができるようになっていきたい。そのためにも、今以上に文献を読んだり、インターンシップや、カンファレンスで先生方とたくさん会話、議論を重ねたりして自分の知識を蓄えて、テーマを実現できるようにしていく。



修了生だより

Newsletter 154号に引き続き、今回は修了生の山田教諭から実践や取り組みに関わる原稿が寄せられました。5ページで構成されている原稿を以下に掲載させていただきます。

子どもたちと共に駆け抜けた3年間 -教師3年目の今、自身の実践をふり返る-

福井市宝永小学校 教諭 山田 芳裕

2021年末、スマホに一通のメールが届いた。院生時代にお世話になった荒木良子先生からで、内容は本稿の依頼であった。採用から、丸3年が経とうとしている今、これまでの実践をふり返る良い機会だと思い、今キーボードをたたいている。また、教職大学院修了時に執筆した長期実践研究報告書の内容も再確認しながら、自分自身が大切にしてきたことは何だったのか改めて考えていきたい。

【学級経営について】

①3つの約束

2019年4月。平成最後の採用者として、福井市宝永小学校に赴任した。1年目は5年生の担任として、25名の児童を担任することになった。児童の前に立った時の気持ちを、今も忘れることができない。緊張と不安、そして少しの期待を抱えて教壇に立ったことを覚えている。

初めて子どもたちの前に立ち、教師として3つの約束をした。絶対に守って欲しい約束として話した。

①いじめは絶対に許さない

②うそをつかない

③自分や友達の命を粗末にしない

話した時、児童たちはしっかりと目を見て、聞いてくれた。一安心。

2019年4月8日（月）のメモより

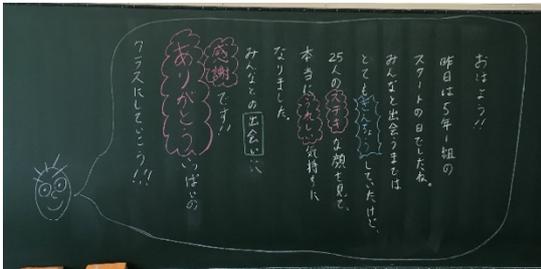
久しぶりに当時のノートを開くと、上記のようなメモを見つけた。予定帳の片隅に、一日感じたことを一言程度のメモに残していたことを思い出した（現在はできていない…）。この3つの約束は、当時担任をもつ上で、絶対に児童に伝えたいと思っていたものだった。学級経営を行う際の、いわば基盤のようなもののように感じる。命に関わることについては、毅然とした態度で指導する信念は、今ももち続けている。

②おはよう黒板

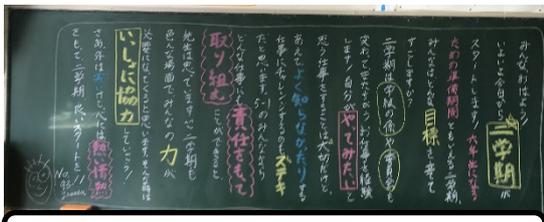
採用されてから今日まで、毎日続けていることの一つに朝の「おはよう黒板」がある。毎朝、黒板に数行のメッセージを書いている。内容は児童の良い所、授業のふり返り、雑学、クイズと多岐にわたる。始めたきっかけは、日々の小さな取り組みや変化、児童が発した一言に私や児童たちが成長するヒントを見つけていきたいと願ったためである。もちろん、内容が薄くなってしまいうちや、他の業務に追われ「書きたくない」と思ったこともあった。しかし、3年目の今日まで続けてこれたことは、少しばかり自信に繋がっている。

黒板を読んだ児童たちの反応は様々で、「ぼくの名前があつて嬉しい」「クイズをたくさん書いてください」「いつの時間に書いているんですか？」などと、嬉しい言葉をかけてくれる。

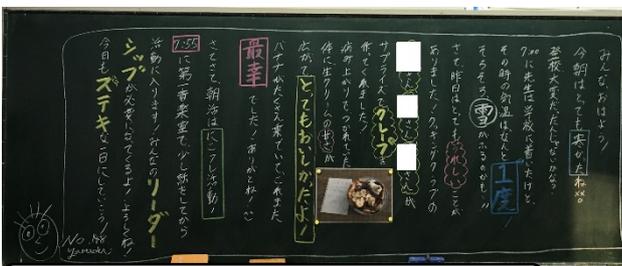
これまでに記した内容をふり返って見てみると、当初は授業で紹介し切れなかった児童たちの発言を取り上げたり、授業の導入になるようなクイズを出したりする内容のものが多かった。しかし、最近のものだと、少しその色は薄くなり、「人生の少し先を歩む者として、伝えていきたいこと」が多くなっていると感じる。改めて、これまで残してきた記録を振り返ることの良さを感じることができた。今後は、両者のバランスをとりながら、内容を工夫したいと考えている。



2019年4月8日



2019年10月16日



2020年1月22日

【授業実践について】

この3年間の実践の中で、主なものを紹介したい。

①1年目「5年生道徳」「見えた答案」

初任である今年から「道徳」について児童と共に考えていくことで、今後教師を続けていく上での基盤となる「授業観」や、児童個人の思いを大切にしたい授業づくりの視点を身に付けることができると考え、実践を重ねた。

この日は、「見えた答案」という教科書教材を用いた授業を行った。ねらいは、自分の「誠実さ」を捉え直し、今後の生活に生かしていくことである。教材の主な内容について以下に記す。

教材名 「見えた答案」 (東京書籍)
<p>おかあさんが熱を出し、テスト勉強が十分にできなかった花子。算数は得意科目のため、大丈夫だと自分に言い分かせていた。テストを進めていくと、どうしても最後の応用問題が分からず悩んでいた。その時、たまたま隣の席のよし子の答案が見えてしまい、花子は夢中で応用問題の答えを書いた。その日はすっきりしない一日になり、結果が返ってきて100点満点だったが、みじめな気持ちになり、もう二度としてはいけないという思いになった。</p>

教材を一通り読んだ直後、児童に「花子の行った行動は、いけないこと？」と発問を行った。すると、ほとんどの児童が「絶対にだめ!」「花子はいけないことをした!」と意見を述べた。私自身、この反応は当たり前であると予想していた。しかし、Tくん(男子児童)のある発言をきっかけに、授業は思わぬ方向に大きく舵を切ることとなった。以降の授業での会話を以下に記す。

児童T:(花子は)あかんと思うんですけど、(テストを見てしまった花子の)気持ちは分かります。悪いっていうのは分かっているけど、思わずやってしまう時だってあると思います。

教師(山田):なるほどね!みんな、正直Tさんの意見に少しでも共感できる人いる?

児童：（数人が手を挙げる）

児童S（女子）：（信じられないという顔を浮かべながら）え！？絶対あかんと思います！カンニングはだめです！そんなんで100点取っても嬉しくない！

児童H（女子）：テストではしないと思うけど、（計算や漢字の）小テストなら、しちゃうかも。

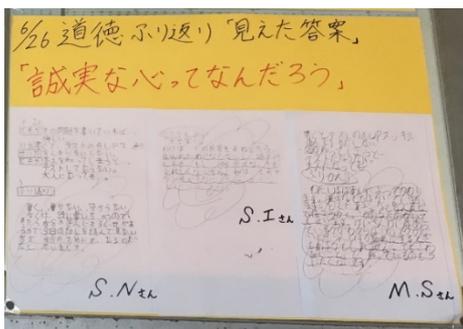
児童A（男子）：小さいテストだって、カンニングといっしょやし！

児童M（女子）：カンニングは「答えを見る気」満々じゃん。今回は「見えてしまった」やで、仕方ない。

（以降討論が続く）

<成果>

Tくんの発言により、これまで児童が当たり前と思っていた「カンニングはだめだ」という行為について、深く考えることができた。「なぜだめなのか」といった理由や、児童一人一人の考え方の違いが明らかになり、最終的には「答えが見えてしまったら、書いてしまう」という考えと「見えても、絶対に書かない」という二つの考えに分かれて、意見を出し合う様子が見られた。Tくんの発言のおかげで、児童が、一つの課題に対して深く考え、友達と意見を交換し合うことの大切さを実感することができたと考える。授業の中で発言が少なかった児童も、ノートの振り返りには自分の考えを書くことができていた。児童S（大人しく発言が少ない女子児童）の振り返りには、「授業で、絶対に（答えを）書かないと言っていた子がいたけど、本当にその場面になったら、書いちゃうんじゃないかなと思います。」と書かれており、友達の性格等を彼女なりに分析し、様子を捉えることができていた。後日、児童の感想を記載した振り返りを、教室に掲示した。



<課題>

教材として考えるべき内容を、児童の生活や経験に落とし込むことができるかが挙げられる。児童の実態と離れた題材の場合、児童はどうしても「自分事」として考えられなくなるからである。児童に寄り添った教材の設定や、課題の吟味を今後も続けていきたい。

<全体のふり返り>

道徳以外の教科においても、児童が友達の考えを認め、受け入れ、学びにつなげていくことは、非常に大切だと考える。そして、児童と共に学習を創る教師を目指し、これから前進していきたい。

②2年目「6年生道徳」「ばかじゃん！」

1年目の実践をふり返ると、授業の中で考えを深めたり、友達の意見を聴いて納得したりする場面を多く取り入れることができたように思う。しかし一方で、授業以外の学校生活において、友達の良さを認められなかったり、意見がぶつかり合ったりする場面も少なくなかった。

そのような課題を踏まえて2年目は、学校生活全体を通した「集団」という点に意識を置き、実践を行った。

教材名 「ばかじゃん！」（東京書籍）

父親の仕事の都合で、新しい学校に転入してきた恵理菜。前の学校では、友達との関わりで嫌な思いをしてきた経験がある。新しい友達であるきのちゃんから言われた、「ばかじゃん！」の一言に傷つき思い悩む。そんな時、前の学校でいっしょだったかおりと出会う。恵理菜はかおりに意地悪された過去があり、その真意についてかおりに問う。かおりと話をすると、それが誤解だったことが明らかになるが、もう手遅れだったことに気づく。その翌日、恵理菜はきのちゃんの所に向かい、なぜ「ばかじゃん！」と言ったのか問う。きのちゃんは、恵理菜が傷ついていることを知って驚き、謝罪する。二人の

間に誤解があったことを知り、お互いに笑顔になる。

<成果>

授業後、ある女子児童Aのふり返しには以下のような記述があった。

よりよい友達関係を築くには正直に意見を言うことが大事だと分かりました。私は発表することができなかったけれど、相手を不快な気持ちにさせてしまったりしたら、あやまることも大事だと思いました。今まで私は思ったことを正直に言えないことがけっこうありました。これまで正直に言うことができなかったので、これからは相手の気持ちを考えながら正直に思いを伝えたいです。

上記のふり返しを書いたAは、実際に学級の友達との関わりで悩みをもっていた児童であった。友達から嫌なことを言われても、正直に自分の意見を言うことができない現状を理解しており、このままではいけないと思っていることが伺える。実際に、この授業の翌日、社会の授業でグループを作ることになった時、嫌だと感じている児童Bが無理矢理同じグループになろうとすることがあった。これまでなら思っていることを言えず、その児童の言うことを聞いてしまう場面であったが「Bちゃんの行きたいグループに行けばいいんじゃない。」と、Bに対して、思っている意見を伝えることができていた。道徳の授業での実践化が見られたように感じる。

<課題>

授業の中で、児童のたくさんのつぶやきが見られた。しかし、そのつぶやきを拾ってさらに児童の意見を「深める」ことや「切り返す」ことが十分できなかった。授業を参観してくださった先生方も、「いいつぶやきを言ってる子がいたのに」と指摘があった。児童が教師の発問に対して、その時のつぶやきを見極め、どう問い返していくかが道徳で児童の思考を深めるには必要なことを学んだ。

<全体のふり返し>

授業をする上でまず大切なのは、「本音が言える学級集団」であり、「本音が引き出せる発問や授業の流れ」であることを肌で感じた。本音のやりとりがあつてこそ、道徳の授業に価値が見いだされ、児童の考えが広がり、深まると確信した。そのために次年度は、道徳の授業はもちろんだが、他教科の授業にも、学び合い、高め合う意見交流の場を設定し、ICTを活用した授業研究を重ね、児童同士が互いに成長していけるような集団作りに努めていきたい。

③3年目「6年生体育」

「ICT機器を活用した、「できる」「分かる」「考える」体育授業づくり」

2年目の反省から、3年目は専門教科である「体育」に焦点を絞り、ICTを活用した「新しい時代」の体育授業づくりに取り組んでいきたいと考えた。運動量が確保され、児童自身が課題を発見し、「やりたい」「できるようになりたい」と思える授業を展開したい。今年度は、視聴覚主任を任されたこともあり、宝永小学校としてのICT機器を活用した授業づくりを先駆けて行っていきたい。「Society5.0」と言われる超スマート社会が、近い未来に訪れようとしている。より一層、新しい時代を生きていくための力をつける取り組みを考えていく必要があると考える。

6年生 器械運動「マット運動に挑戦しよう」

11月にマット運動の授業を行った。単元のためを工夫し、タブレットを買う塗油した活動を取り入れた単元構成を考えた。本年度は、県教委の体育科・保健体育科授業づくりサポート事業で、指導主事の指導を受ける機会を得ており、参観当日にはマット運動の基本的な技である「後転」に焦点を当てた授業を展開した。

字ページの図は、その時に使用したワークシートである。



まず、めあてである「美しい後転」を意識できるよう、技のポイントを6つ紹介した。次に、タブレットで撮影して、自分の後転の様子を確認してもらった。自分ができているポイント、できていないポイントについて、自己評価を行った。児童の中には、全てのポイントに△をつけている者もいたため、「この中で、もうすぐできそうな惜しいポイントはどれ？」と、児童の意欲が高まるような声かけを行った。

<成果>

児童が自由に自分の姿を撮影してもらうことができることから、より高い意欲をもって活動に取り組むことができたように思う。また、撮影した動画を繰り返し見ることで、上手くできているポイントや、そうでないポイントを客観的に分析することができ、練習を効果的に行うことができた。これまでだと、マット運動が苦手な児童は、積極的に活動できていない様子が伺えたが、友達同士で撮影し合うことにより「自分の動きをもっと良くしたい」という思いが高まったように思う。

さらに、ワークシートで後転を上手に行うポイントを示したことにより、児童が自分たちで考えて、撮影する位置を変えていたことも良い点だった。始めはマットの正面から撮影するだけだったが、後転のポイントを見ながら「手の付き方は横から撮ろう」「まっすぐ回れているかどうか見てみよう」などと友達と話し、考えながらタブレットを操作する姿が見られた。

<課題>

タブレットの使用により、児童の活動意欲に高まりを感じることはできたが、その反面、体育の中の言語活動が少なくなっているという課題が上がった。児童は友達同士で撮影し合っているが、その後はそれぞれのタブレットを扱うのみで、友達との対話の場面を生み出すことができなかつたように思う。撮影するだけでなく、撮影しながら気づいたことをアドバイスしあうことができると、更に言語活動が充実すると思った。

また、指導主事からは、言語活動の精度を高めるために、よりポイントを絞った活動でも可能だというアドバイスをいただいた。本時はポイントを6つと多く設定してしまったため、今後は3つ程度と数を減らし、一つ一つのポイントに目を向ける時間を多くすることで、更なる対話を生み出す手立てを考えていきたいと思った。

【3年間のふり返り、今後の展望】

3年間をふり返ると1、2年目は「道徳」、3年目は「体育とICT」と教科は違えど児童に寄り添った指導を常に心がけて、日々実践を重ねてきた。児童のつぶやきに耳を傾け、授業を作っていく難しさと達成感を味わうことができた。児童の「知りたい」「もっとできるようになりたい」という思いをくみとり、どのように授業をデザインしていくべきか、常に考えていた3年間だったように思う。これからも児童一人ひとりをよく見て理解し、共に信頼関係を築きながら、よりよい授業作りや学級経営に取り組んでいきたい。今年度で3年目が終わり、若手とは言われないう立場になる。自己研鑽を怠らず、日々一層精進していきたい。



図書紹介

小坂康之・林公代

『さばの缶づめ、宇宙へいく——鯖街道を宇宙へつなげた高校生たち』 (イースト・プレス、2022年)

福井大学連合教職大学院 准教授 遠藤 貴広



2019年3月に本教職大学院を修了した小坂康之氏の new刊。

いつ行っても、おもしろい話題に事欠かない若狭高校。その象徴となっているものの一つが、生徒が開発・製造した宇宙食サバ缶。高校生が宇宙食を開発・製造するという世界初の快挙がどのよう

に成し遂げられたのか、その感動的なストーリーは、刊行当初から多くの読者を惹き付けている。

ただ、本書には、ただの感動的な読み物にとどまらない魅力がある。例えば、宇宙食に採用されるまでに越えなければならない様々な高いハードル。ここまでやらないと宇宙食には採用されないのか…と、驚くことばかり。濃いめの味付けにして汁が飛び散らなければそれでいい、という単純な話ではないことが、本書からよく分かる。

また、本プロジェクトは困難な状況から出発し、様々な壁にぶつかりながら進展していくわけだが、その時々状況をどう捉え、それに対してどのような行動を起こしてきたか、それを描く角度がなかなかユニーク。私は担当教員の一人として若狭高校の実践や小坂氏の語りに長く寄り添ってきたつもりではあったが、私と小坂氏の間では出て来なかった視点が、ライターのエッセイ氏との間で次々と繰り出

され、その業界に通じているからこそ出せる独特の見方を楽しむこともできる。

さらに、当時、地域で最底辺の教育困難校と見られることもあった小浜水産高校が、統廃合の危機にさらされるも、県教委の改革案をそのまま呑むことはせず、学校を応援する市民によって民主的な方法で新たな落とし所が探られ、そして、その地域の職業系の学校ではなく進学校と統合することで、水産教育にとっても進学校にとっても良いところが引き出される、その構造改革のプロセスの一端が本書の節々で垣間見られるところも大きな魅力。この点、本教職大学院修了生によるユニークな実践の紹介にとどまらず、学校改革マネジメント・プロセスの重要事例としても興味深い。

本教職大学院でよく読まれているデボラ・マイヤー『学校を変える力』で描かれているセントラル・パーク・イースト中等学校の物語は米国で「イースト・ハーレムの軌跡」と呼ばれているが、本書で描かれている小浜水産高校から若狭高校に引き継がれた物語は「オバマの軌跡」として後世に伝えられることになるだろう。

なお、小坂氏によると、「この視点で書けたのも教職大学院での学びが土台です」とのこと。実践自体は長く続けてきたことではあったが、教職大学院に入って多様なメンバーと対話を重ねる中で言葉にする努力をしていなかったら、ここまで語り書くことはできなかったという。本教職大学院での長期実践研究報告を礎に新たにどのような物語が紡ぎ出されるか、院生・修了生の次の作品にも期待したい。

Schedule

- 2/19-20** 実践研究福井ラウンドテーブル **Spring Sessions 2022**
- 3/5 Sat.** 第3回大学院入試
- 3/18 Fri.** インターンシップ説明会
- 3/23 Wed.** 学位記伝達式

Newsletter は、教職大学院に関わる皆さんの協力で作られています。
修了生の皆様もご自身の実践や近況について投稿してみませんか。
関心がある方は、dpdtfukui_nl@yahoo.co.jp までご連絡ください。

【編集後記】ニュースレターに年間に掲載される記事の数をご存知でしょうか。巻頭言や特集も含めるとなんと265本(2021/2/1~2022/1/31、編集担当によるカウント)。ニュースレターを担当しての驚きは正にその膨大な情報量にあります。加えて、これらは静的に生み出されるのではなく、カンファレンス、ラウンドテーブルなどの往還によって生み出されるダイナミックな成果物です。これから迎える長期実践研究報告会、ラウンドテーブルもしっかり記事にしていきます。(HT)

教職大学院 Newsletter **No.155**

2022.2.19 公開版発行

編集・発行・印刷
福井大学大学院 福井大学・
奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学
連合教職開発研究科
教職大学院 Newsletter 編集委員会
〒910-8507 福井市文京 3-9-1
dpdtfukui@yahoo.co.jp
